自然法爾と即得往生　－親鸞思想の根本－

東京国際大学商学部　教授　荻原　欒

日本人による思想形成を論じる場合、仏教ははずせないし、なかでも、親鸞、道元は、その問題の根源性、攻め口の論理性からいって、特筆すべきものと思う。ここでは、親鸞について、「自然法爾（じねんほうに）」と「即得往生」の２つの話題を、広い意味での自然観と死生観の問題として取り上げ、いささか我流ではあるが解説したい。

自然法爾は親鸞晩年の思想である。私たちの生きているこの世界を自然法爾の世界として捉えようというのが親鸞の立場になる。晩年の法語と書簡を集めた『末燈鈔』に次のようにある。「自然というは、もとよりしからしむるということばなり。弥陀佛の御ちかいの、もとより行者のはからいにあらずして、南無阿弥陀仏とたのませたまいてむかえんと、はからせたまいたるによりて、行者のよからんとも、あしからんともおもわぬを、自然とはもうすぞとききてそうろう」。「しからしむというは、行者のはからいにあらず、如来のちかいにてあるがゆえに、法爾という。法爾というは、この如来の御ちかいなるがゆえに、しからしむるを法爾というなり」。

解説を施せば、「自然」の「自」は、「もとより」の意味であり、「もとより」とは、「行者のはからいでない」、「行者のよからんとも、あしからんとも思うことのない」ことである。「法爾」の「法」は、ここでは「如来の御ちかい」のことであり、上の引用に「行者のはからいにあらずして、如来の誓いにて」とあるから、これもまた、行者のはからいにあらざるものである。念のため言えば、ここで、行者とは私たちのことであり、如来とは、阿弥陀如来（阿弥陀仏）である。然も爾も「しからしめる」という意味だが、分かりやすく、そのようにしからしめられた状態、世界を示す語としておく。すると、「自然」とは、もとよりの世界、「法爾」とは、如来の誓願の世界、となり、ともに行者のはからいを離れた世界であるから、合わせて、自然法爾とは、「如来の御ちかいによる、行者のはからいを離れた、もとよりの（おのずからなる）世界」のことである。ここで、自然の世界は、行者のはからいを離れた世界であるが、行者のはからいを離れるためには、世界を、弥陀の誓願によるところの世界、つまり、法爾の世界としなけ

ればならない。それは、親鸞のあるいは浄土信仰の根本論理である。

これに対して、私たちの普段生活しているこの世界は、行者のはからいの世界である。そこには私たちという自我が存在し、それがことがらを一切仕切ろうと、動きまわる。一方、親鸞の世界は行者のはからいのない自然法爾の世界である。この違いはどこにあるのだろうか。私たちは日常、自分の生きている世界を、自分のものだと思っている。それが、私のはからいということである。自然法爾の世界は、弥陀の誓願による、弥陀の世界であり、したがって、私のものではない。分かりやすく言えば、普段の我々の世界は私のもの、自然法爾の親鸞の世界は弥陀のものであり、所有者が、私から弥陀に移っているのである。そこが違う。

下世話な喩えで言えば、私たちの普段のこの世界、そこでの生活は、自分の持ち家、あるいは、持ち家に生きるようなものである。所有者が自分だから、何をしようと自分の裁量であり、どのように改造しようと、どのような生活をしようと、勝手である。しかし一方、自分の家は、壊れれば自分で直さなければならない、固定資産税も支払わなくてはならず、引越そうとしてもなかなかふんぎれない（あるいはできない）。これに対して、弥陀の世界では、私たちは借家に住むようなものである。借家の場合は持ち家に由来する面倒はない。壊れれば大家さんが直すし、税金は不要で、気軽に引越しできる。しかも、弥陀という大家さんは、規模の大きい大家さんであるから、どこへ引っ越しても、そこの大家さんもまた弥陀であって、いい人だし、旧知であり、気が置けない。すべからく借家に住まうべしである。にもかかわらず、私たちの普段の生活は、持ち家志向である。苦労しても持ち家を望む。あるいは、持ち家ゆえに、いらぬ苦労をする。

仏教の根本問題は、この「私のものである世界」から、どのようにして、「私のものでない世界」に渡るかである。浄土教は（親鸞は）、そこに、「阿弥陀仏」と「信心」という仕掛けをおく。それによって持ち主を私から弥陀に変えるのである。持ち主が変わることによって世界が変わる。ただ、世界が変わると言っても、場所が変わったり、ものが変わるわけではない。材料は同じとしても、持ち主を誰と見るかによって、あり方が変わってくるのである。弥陀のもとでは、同じ行者のはからいも、行者のはからいではなくなる。

次に、「即得往生」である。これについては、例えば、『唯信鈔文意』に「即得往生とは信心をうればすなわち往生すという。往生すとは不退転に住するをいう。・・・即はすなわちという。すなわちとは、ときをへず日をへだてぬをいうなり。」とある。

往生とは、本来は、死んだ後に極楽浄土に往くことである。だから、往生は現実の死の問題である。しかし、私たちにとっては、実際に極楽に往かなくても、往くことの出来る保証が得られていればそれでよい。生きている者にとって死とはそういう問題である。その保証がなされているというのが、「不退転に住する」という言い方である（正定聚の位につくとも言う）。そう理解した上では、即得往生とは、「信心をうれば、即ち、往生する（不退転に住する）」ことである。信心とは、もとより、弥陀の誓願に対する信心である。

普段の生活（行者のはからいの世界）の中で、私たちは、生と死を分けて考えている。生活とは、当たり前だが、「生」の生活である。したがって、「死」はその外のことがらになる。外のことがらとなると、内なる生の論理で説明できないことになり、それ故、死は、生の生活にとって、不安材料なのである。その不具合について、即得往生は、「信心をうれば、即ち、不退転に住する」と言う。不退転に住した上は、必ず、極楽に往けるのだから、これは、第一に、ある意味で、世の中に死というものはないという立場である。全員が往生できるのだから、少なくとも、極楽に往けないような、不安材料であるような死はないことになる。浄土教的には、これによって、外なる死の問題（不安）は解決されたわけである。ここはまた、第二に、こうも考えられる。不退転に住するとは、不退転という形で、すでに往生の（死の）保証を得ていることである。私たちは現に生きているのだが、すでに往生の保証を得ている、これは生きながらにして死んでいることでもある。下世話に言えば、死亡診断書や埋葬許可証を先にもらった上で、生きるというようなものである。こういった見方もまた一つの死生観である。

ただし、ここで、不退転に住するためには、「信心をうれば」という条件がある。そして、この信心という条件は、先の、私たちの普段の世界から自然法爾の世界に渡るための条件でもあった。したがって、自然法爾の世界は即得往生の世界でもある。かくして、世界のあり方の問題と生死の問題が同じ論理によって解決されることになる。

自然法爾、即得往生について、形式的な説明は以上に尽きるが、それに実質を与えるのは我々の信心であり、その信心の正しさと、深さである。それはまた、具体的な生き方の問題でもある。